

2023年1月22日（日）「神に依りて生きぬ」

ハイデルベルク信仰問答より

問7 それでは、人間のこの墮落は、どこから来たのですか。

答え 私たちの第一の先祖、アダムとエバの樂園における墮落と不従順とから来ています。それによって、私たち人間の本質が著しく毒されてしまいましたので、私たちは皆罪のうちには生まれ、生まれるのであります。

ルネサンスという時代は、芸術的に卓越した時代でありましたが、その思想のバックボーンには、「人間至上主義」というものがあつたと言われています。すなわち、「人間が人間自身の尺度である」「人間は自律的で、完全に何ものにも依ってはいない」というヒューマニズムに裏打ちされ、それゆえに人間の理想像が芸術の全面に押し出されました。

典型的な一例として、ミケランジェロ作のダビデ像を取り上げてみましょう。この 5.17 メートルもの巨大な像は、名称的に旧約聖書に登場するダビデが連想されやすいですが、実はそれとは無関係であり、「ダビデ」というのは単なる題名に過ぎないようです。その根拠として、この裸の像の性器には割礼が施されておらず、ミケランジェロがユダヤ人をよく理解していたという事実に著しく反していることが挙げられます。この容姿端麗かつ均整の取れた肉体を持つ男性の像は、「これが自分の明日の姿なのだ！」という人間の理想を表しているようです。そして、体のサイズと比べてアンバランスな大きな手は、人間の力強さを物語っているとされます。「ヒューマニズム」という言葉そのものが示しているように、ルネサンスの思想の中心には人間が神なしで偉大になるという「自律性」が表されている。



このように、ヒューマニズム（人間至上主義）という言葉を紐解いていきますと、どうしても「無神論」に帰結してしまう。芸術の素晴らしさとは裏腹に、人間論的に危険な方向性を示していると言えるでしょう。

ミケランジェロもダ・ビンチも、その生涯の終わりにはヒューマニズムの限界に行き着いたと言われています。これほど多くの傑作を残した彼らも、神なしの世界観ではどうしても到達できない「何か」を見出したのです。

今日はハイデルベルク信仰問答の問7を扱いますが、ここでは「人間の墮落はどこから来たのか」という問題が扱われています。問6では、人間が元来「正しい、聖なる者」として「神のかたち似せて」造られたと言われていました。しかし、問7では、その「神のかたち」は損なわれ「人間の本質は著しく毒されてしまった」と言われています。

私たちの第一の先祖、アダムとエバの楽園における墮落と不従順とから来ています。それによって、私たち人間の本质が著しく毒されてしまいましたので、私たちは皆罪のうちには生まれ、生まれるのであります。

① アダムとエバの楽園における墮落と不従順

創世記3章におけるアダムとエバの背信行為、すなわち禁断の木の実を食べた彼らの罪に関する記事は、改めて読み上げる必要もないでしょう。エデンの園のまことの王は神であり、神の代理として人間は地を治める責任が与えられていました。神の似姿に造られた人間には、神との一糸乱れぬ心の交流があった。神は彼らにただ一つの戒めを与えられた。園の中央にある木の実だけは取って食べてはならないと。この戒めは、人間が自律・自存の存在ではないこと、神に依ってこそ生きる存在であることを意味していたのです。つまり、彼らが蛇にそそのかされて木の実を食べたことは、自らを神から分離し本来持っていない「自律・自存」の道へと踏み出したことを意味しました。神なしに生きていく道、神の戒めとは無関係に、我思うゆえに生きる道の探究へと漕ぎ出したのです。これこそがヒューマニズムの発端であり、神に従う道とは対極にある悪魔に従う道の選択でありました。

少し視点を変えて聖書を読み解いていくと、人類史は直ちに「神に従う道」と「悪魔に従う道」の二方向へ分かれていったことが分かります。それは、二代目のカインとアベルの関係において早速現れ始めました。アベルは神を愛し従順を示した。一方、カインは神を憎み、神を愛する者を殺害した。ヒューマニズムという考え方を遡っていくと、何と殺人者カインに行き着いてしまうのです。現代に至るまで、カインの子孫は自分の利得のためとあらば人を殺めることさえ厭わない。戦争の歴史はそのことを物語っているでしょう。

② 私たち人間の本质が著しく毒されてしまいました

問7の答えが指し示している重要な真理は、これを書いている当事者自身がこの「無神論」と無関係ではなかったことを明らかにしている点です。「私たち」という言葉が注意深く書き込まれているのを見落としてはなりません。すべての人間に具わった自己中心性を彼は深く認識していたのです。そして、その自己中心的な生き方の根底にあるのが、神に依らないで歩もうとする人間の本质である。それは生まれた時から不可避的にすべての人間に具わった性質なのです。

私はこのことを神学生の頃から繰り返し聞いてきましたが、それを論理としては理解できたものの、どうしてもそれが自分の中で空回りしているような感覚を覚えていました。墮落の教理が分かり、人にも説明できるようにはなった。しかし、アダムが犯した罪が何十万年という時を経て自分に影響を及ぼしているということを、本当に心で受け止めているかどうかは確信が持てませんでした。この教えが自分の中で受肉したのは、自分もまた悪魔の誘惑に遭い、その誘惑に屈し、その刈り取りをしなくてはならなくなったときでした。何らかの罪を犯すとき、私たちは自分が進もうとしている道が「偽りの道」であることを全く理解していないわけではないでしょう。しかし、目の前に差し出された美味そうな果実を取って食べ、それが腹の中で

毒に変わるとき、自らの意志で偽りを選択した事実気づくのです。そこには、アダムとエバが陥ったと全く同質の畏がある。おそらく、誰もが何らかの意味でこのような経験をしてきているのではないのでしょうか。

③ 私たちは皆罪のうちには生まれ、生まれる

アダムとエバの罪は遺伝的に子孫に受け継がれるようになったと聖書は語ります。アベルという名前の由来を探ってみると、アダムとエバが親として味わった失望が読み取れるような気がするのです。第一子カインに対し、彼らは一縷の望みを託したことでしょう。自分たちが神に対して犯した罪、墮落してしまった性質が、自分たちの代で終わることを期待したと思われる。生まれてきたカインに罪の性質が宿っていないことを切望した。生まれたばかりのカインは愛らしく、罪とは無縁の存在にすら思えた。しかし、その子が成長するにつれて、そうではないという事実が判明してきたのです。カインの中にある神への反抗心は日に日に露わになっていきました。愕然とした彼らは、二番目に生まれた子どもを「アベル」と名付けました。アベルとは「息」という意味で、コヘレトの言葉で「空」と訳されている語と同じです。つまり、この名付けには人類全体に対する絶望が込められていたと考えられる。自分たちの犯した罪が、未来永劫子孫に波及していくことをアダムたちは読み取ったのです。

さて、問7だけを読むならば、このような絶望的な結論で終わってしまうかもしれません。しかし、アベルの人生を見るならば、必ずしもそうではないということが分かってくる。念のため創世記4章の記事を読んでみましょう。

さて、人は妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は主によって男の子を得た」と言った。彼女はさらに弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。日がたつて、カインは土地の実りを供え物として主のもとに持って来た。アベルもまた、羊の初子、その中でも肥えた羊を持って来た。主はアベルとその供え物に目を留められたが、カインとその供え物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。主はカインに向かって言われた。「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしあなたが正しいことをしているのなら、顔を上げられるはずではないか。正しいことをしていないのなら、罪が戸口で待ち伏せている。罪はあなたを求め、あなたはそれを治めなければならない。」カインが弟アベルに声をかけ、二人が野にいたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。(創世 4:1-8)

ここに描かれているアベルについて、彼が神に対する反抗心を示したということは一言も書かれていません。しかし、彼もまたアダムの罪を負って生まれてきたということは、その名前が暗示しているように思えます。アベルもまた、悪魔の誘惑に屈したことがあったに違いありません。そのことを悔い、心を痛めたことがあったと思われます。しかし、彼はその人生のどこかで神を見出したはずなのです。神を知り、神を心の王座に据えて生きる道があることを知った。そこにまことの喜びがあることを発見した。罪が赦されたことを知った。だからこそ、

彼がささげた供え物は心からのものだったのです。神が自分を愛してくださっていることを知り、自分も神を愛したのです。

原罪というものは、確かに代々受け継がれていきます。しかし、神は拡大していくヒューマニズム的な世界の中に、一本の信仰の系譜を残してくださいました。それが、アベルの道であり、ノアの道、セムの道、アブラハムの道、ダビデの道、キリストの道です。聖書のどこを読んでも、罪のない時代は存在しません。主イエスの時代でさえ、ユダヤ社会を形成していたのは、自分たちの利得を第一とした最高議会であり、それに追随する指導者たちでした。主イエスはその勢力と戦って殺されたとも言えます。しかし、主の死は無駄にはならず、地に蒔かれ、主のいのちはまことの教会を生み出し、永遠に残る福音を受け継がせるものとなりました。私たちが教会に集い、へりくだって御言葉に聞き、神と共に歩もうとするところには、アベルより流れくる信仰があるのです。私たちの人生にこの幸いが与えられたことを感謝します。主の御名を誉め讃える人生を歩み抜いてまいりましょう。

【祈り】

ご自身との愛の交わりを求めて私たち人間を造り給うた、天の父なる神様。しかし、人は道に迷い、羊のように彷徨っています。神ならぬものに聞き従い、自分という存在そのものを見失っています。アベルはそのような人生から贖われ、神との関係の内を歩み始めました。そして、その道を全うしました。私たちにも主イエスとともにある人生を歩ませてください。この信仰が最後まで守られ、その幸いを証しすることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
アダムとエバを、ご自身との関係の内に、地の良き管理者として立て給うた、父なる神の愛、
サタンに心捕えられた者を、ご自身のいのちという代価をもって買い戻し給うた、主イエス・
キリストの恵み、
神とともにある祝福の内を、終わりまで歩ませ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。